

不可視の翳りへカメラを向ける ——再現するドキュメンタリー

阿部宏慈 (フランス文学)

映画は、ましてドキュメンタリー映像において、見るべきは映像であって、画面にないものを語るべきではない。それはたしかにその通りなのだが、それでもなお映像は時に不可視なるものへのまなざしとなる。

出来事が私たちの感覚的尺度を超える時、私たちは、見えるものの向こう側へとまなざしを届けたい衝動に駆られるだろう。それが過去の出来事（殺戮、喪失あるいは災害）である時、眼前の景色は、たちどころに言い知れぬ翳りを帯びる。アジェの撮影したパリの街並について、ヴァルター・ベンヤミンは、犯罪現場の写真のようだと言ったが、それが現に犯罪の現場であるとき、翳りはもはや隠しようもない。

不可視の翳りを、可視化し、再現／再現前させるとするのなら、それはどのようになされなければならないのか。あるいはなされるべきではないのか。たとえばインドネシアにおける軍事独裁政権下で、しばしば何の根拠もなく反政府活動の罪をきせられ、殺害された多くの人々の物語。それを、殺戮に手を染めた、殺人者集団のリーダーたちに証言させること。『殺人という行為』（ジョシュア・オッペンハイマー）は、殺人部隊の伝説的リーダーを主人公として映画を撮るという枠組を提供することによって、殺人者そのものの声と映像を突きつける。ほとんど舞踏的とも言えるスペクタクルとして、密室での、ビルの屋上での血なまぐさい行為を嬉々として再演する殺人者の、憑かれたような姿、さらにはビデオに映し出されるおのれ自身の映像にうっとりとして見入る姿は、それ自体ひとつの映像的凶器／狂気として見る者に突きささるだろう。

大量殺人と震災と津波による被災を同じ平面上で語ることはできない。しかし、その体験の尺度を超える大きさあるいは強さゆえに、把握さえしえない出来事の想起という点では、『なみのこえ』（酒井耕、濱口竜介）の語り手たちもまた、覆いきれない傷を生き延びることに変わりはない。その上で、一見おだやかな情愛に満ちた家族の語りは、その彼方にある翳りとともに生きてあることの平凡ともいえる希望を伝えて来る。同じ作者たちによる『うたうひと』の昔語りにもそのような翳りのよぎる瞬間がある。夜の川辺で目撃された足のない武者たち。民話の彼方から蘇る死者たちの影。『遠野物語』を彷彿させる怪異譚は、語りの飲み

と悲哀のうちに引き込まれた語り手自身（ひいては聴き手）の人生を浮かび上がらせずにはおかない。

『リヴィジョン／検証』（フィリップ・シェフナー）では、逆に、東ヨーロッパの国境付近、とうもろこし畑の片隅で起きた不法入国者の射殺事件、ハンターによる一見不慮の事故とも見える射殺事件を中心点として、証言の波が、まるでトウモロコシの葉を波立たせ過ぎる風のように広がっていく。人々は「私達も本当のところ何が起きたのかは知らないのだ」と言いながら、だからこそ「今こそ、語るべき時だと、考えた」と述べる。語り手は、一方的に語るだけにとどまるわけではない。語るということは語りつつあるおのれの声に耳を傾けることでもある。証言者は、録音された自身の声に耳を傾けることで、自らの声の聴き手ともなる。その、自らの証言に耳を傾ける証言者の姿を目にすることで、観客もまた、見えない何ものかを凝視しようとつとめずにはいられない。20年前の墓地荒らしの現場で「その傍らに立っているけれども、それと認めさせる何ものもない」ことへの恐怖を隠しきれない聖職者と同様に。

だからこそ「検証」に終わりはない。語り継ごうとする意志にも。2003年の映画祭で上映されたリティー・パニユ『S21——クメール・ルージュの虐殺者たち』は、作家自身の終わることない問いかけの映像化だった。映画は、ポル・ポト政府の一員として多くの市民を拘禁、虐待、殺害した当の加害者が、かつて自分たちがおこなった行為を、その現場において再演するさまを映し出した。目に見えぬ犠牲者に向かって、機械のように命令を下し暴力を振るう看守の姿に、私たちは、むしろ再現しようとしても再現し得ない、表象不可能なるものの現前に立会う思いだった。

リティー・パニユ自身は、最新作『失われた映像』（2013）において、ようやく自身の収容所体験と家族喪失の物語を語るだろう。ただし、無表情な人形を媒介として。それに対し、『何があったのか、知りたい（知ってほしい）』（エラ・プリーセ、ヌ・ヴァ、トゥノル・ロ村の人々）に登場する村人にとって、語りはようやく始まったばかりだ。「教育」という口実で夫を連れ去られ、虐殺された女性。子供を失った老婆。クメール・ルージュの姿も知らない若者たちに、彼らの服を着せ、スカーフの巻き方を教え、家族を虐殺された過程を自らの身体を提供することで再現する村人。彼ら

に、語るべく促し、カメラを向け、マイクを突きつけるのもまた同じ村人であり、村の子供たちだ。彼らにとってはもはや語りは彼方にある何ものか、出来事の全体への倫

理的な検証のまなざしを超えて、日常の中で無限に繰り返される過去への問いと想起の、民俗的とさえいえる実現となるだろう。

■上映

『殺人という行為』【IC】10/12 10:00- [A6] | 10/13 18:00- [CL]

『なみのこえ』【IC】 10/12 16:30- [A6] | 10/14 14:30- [CL]

『うたうひと』【PJ】 10/13 10:00- [F3] | 10/14 18:50- [F4]

『リヴィジョン／検証』【IC】 10/11 18:45- [A6] | 10/14 19:00- [CL]

『何があったのか、知りたい（知ってほしい）』【NAC】

..... 10/12 13:30- [F3] | 10/13 10:30- [F5]